八幡の森

伊藤左千夫

青空文庫

市川の宿も通り越し、これから八幡といふ所、天竺木綿の大きな國旗二つを往來の上に交扨して、其中央に祝凱旋と大書した更紗の額が掛つてゐる、それをくゞると右側の屑屋の家では、最早あかりがついて障子がぼんやり赤い、其隣りでは表の障子一枚あけてあるので座敷に釣つてあるランプがキラリと光を放つてゐる、ほのくらい往來には、旅の人でなく、土地のものらしい男や婆さんやがのつそりのつそりあるいてゐる、赤兒をおぶつた兒供やおぶはないのや、うよ〳〵槇屏の蔭に遊んでゐる、荒物店の前では、荷馬車一臺荷車一臺と人が二三人居つて何か荷物を薄暗い家の中へ運でゐる、空にも星が一つ見えだした、八幡の森にも火が點じたすべて寛やかな落着いた光景、間もなく鳥居の前へくる。

鳥居が薄白く見える、能く見ると少し光つてゐる、トタンで包んだ鳥居は西燒けのあかりを受けて、かすかに光るのであつた、左へ鳥居を這入ると、鳥居についた左手に、屑屋の小さな飲食店がある、前に葦簾が立てゝあつて中の半分は見えない、今カンテラに火をつけて軒口に吊つた所で、油煙がぽつぽと立つ低い茅の軒へ火がつきやしないかと思はれる、卵や煮肴やいろ〳〵の食物が、各大小相當の皿に盛られて雜然並べてある、それでも中央の前の柱のカンテラの下には、掛花生に菊の花がさしてある、婆さんらしいのが表へ尻を向けて仕事をしてゐる。家の中ではランプが今一張ついた、これが八幡神社の入口である。

二人は社に向つてゆく、空は未だ全く暗くなつてはしまはぬ、右手の農家の前では筒袖をきて手拭を冠つた男が藁しべなどを掃いてゐる、左手の何か大きい四角の石で女らしいのが頻りに藁を打つて居る、夜なべに繩をなうか、草履でもつくるのであらふ。

それから先は兩側の松林が幹を差替はす許に遠くつゞいて石疊の路を掩ふてゐる、奥にはほんのり暗くて何のあるのも判らない、只敷石の道が白く長く帶を延した様に奥深く通じて居るのが見える許りである、予等二人が十五六間も進んで這入つてゆくと漸く前面にぼんやり萱葺の門が見えだした。

先年桃林の花を見に來た時此門前に一人の婆さんが茶を賣つて居つたことを思ひ出す、近いて見れば無論婆さんは居ない、茶店のあつたらしい所には石が三つ四つ並んで居る、見たところ今でもあの婆さんが出るのかどうかは知らないが、兎に角日中は茶店がある様子だ、左右の矢大臣もそれと許りほのかに俤が見える、門を這入る、木の葉が石の上にひたに散つてあるのが下駄にさはる、がさ〳〵する音が耳立つて聞える二人は無言で進む靜なことはこほろぎも鳴かぬ。

正面に社殿が黒くぼつと見えて來た、前に張られた七五三飾が、繩は見えないで、御幣の紙だけ白く並んで下つて居るのが見える、社殿の後は木立が低いので空があらはれた、左右の松木立の隙間にあらはれた空の色が面白い、薄い茶色に少しく紫を含んだ、極めて感じのよい色である、油繪にもかういふ色は未だ見ない、西洋の寫眞にこういふ色を見ることがある、西燒のあかりが未だ空全體に映つてゐるのであらふ、松林にまじつてゐる冬木が幾分の落葉を殘してゐてほんのりとした梢の趣が其空の色と調和がよい油繪が出來たらなアと思う、空の色がよいなと思つた眼を稍下へ見下げると、社殿の右手の木立が西あかりを受けてかあたりが一體にあかるい、其あかるいのに何となし光がある様に思はれる、不折君の所謂繪具の光

といふことなど思ひだす、あたり一面に色ある落葉が散つてゐる、がさ〳〵落葉を蹈みちらして進む、拝殿の柱に張つた七五三と思つたは、社殿二間ほど前に兩側にある松に張つてあるのであつた、松の根にある唐獅子は只黒ずんで見える許り目も鼻も判らぬ、臺石に點々色がある、落葉かと思つて眼を寄せて見れば黒ボクの石の隅々をついだシツクイであつた、二人社前に正立し帽を脱て默拝した後右手へ廻る。

先に西あかりを受けた木立の色と思つたは、非常に大きい銀杏である、丈はそれ程でないが、幾百本とも判らぬ幹が總立に一纏りになつてゐるから、全周圍は二三丈もあるであらふ、思へば先年參詣の時門前の婆さんが千本銀杏と申しますと云はれたのであつた、落葉は未だ三分の一にも達しない、光る許の黄葉を薄暗い空氣でつゝんだ趣き、あかるいやうでも物の判らぬ夢のやうの感じだ、いやどうしても適當の形容語が出來ない、其銀杏の蔭に立つて居ると、黄色い空氣の中に這入つて居る感じで、さうして、それが薄暗い夜の感じで何とも云へないよい感じである、ステツキで枝を打つとばら〳〵葉が落ちる、非常に靜であるから帽子に落つる音が聞える、其音が夢で聞くやうな感じのする音である、暫く遊んでゐて見たかつたが、時刻が時刻故さうもいかないで裏を一週して、西手の白壁がある板倉の脇へ出る、社に板倉は不調和の感じがした。

二人は歸る方向になつて西を向くと、西燒けの殘光が未だ消え切らないで、木々の隙間から地平線に明るい、今まで暗いと思つた松林の根もとがはつきりと見えた、神樂堂の上には背の高くくねつた松が空に自分の影を摸様の如くに押して居るのが一寸面白い、直ぐに出て了ふのは如何にも惜しいやうな氣がして、屡々銀杏を振返り、あたりの趣を眺めつゝ、偶然の思ひつきで、趣味深い時刻に來た仕合を語り合ひつゝ出る。

不知八幡森も予は幾度か見て居るが、つれの人は始めてゞあるから、一寸立寄つたけれど、もう暗くなつて石牌の文字も判らない、森といふは名許で今は全く竹藪に變つてゐる、竹藪の中は闇々として暗いばかり空は青ざるばかりに澄んで、そよとも動かぬ大竹藪の上には二三十の星が冷に光つて居た。

明治39年1月『馬酔木』

署名　左千夫

青空文庫情報

底本：「左千夫全集　第二巻」岩波書店
　　1976（昭和51）年11月25日発行
底本の親本：「馬酔木　第三巻第一號」根岸短歌会
　　1906（明治39）年1月1日
初出：「馬酔木　第三巻第一號」根岸短歌会
　　1906（明治39）年1月1日
※初出時の署名は「左千夫」です。
入力：H・ＹＡＭ
校正：高瀬竜一
2013年8月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八幡の森

伊藤左千夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/